

月刊 学びREVIEW

[rivju:]

2019 12
月号



Report

次世代に向けた通信制教育の在り方を検討

新しい学校の会「教育シンポジウム」

Series

通信制大学サポート教育

「多様なグループ企業活かし人材育成」KTC カレッジ

スペシャル対談

明蓬館高等学校 アットスクール高等学院
日野公三理事長 × 鈴木正樹学院長

連載 こころのそえぎ (2)
子どもも大人も忙しく、
心を亡くしていく

Interview

教育委員会・学校と連携
有限会社グローバル教育研究所

連載 不登校支援の輪 (1)
偏った情報に左右されず
正確な「進路選択」をするには？



学びリンク

連載

不登校支援の 車輪

第1回

偏った情報に左右されず
正確な「進路選択」をするには？

不登校生の保護者の会「ぼちぼちの会」

会長 木村 素也

先月号のシリーズ「家族の保健室」(進路のハナシ 親子の本音)の中で、進路選択時の親子関係について書かせて頂きました。ここでは、その時に書ききれなかった内容、特に「不登校生徒の進路選択」における心理状況や学校選びのポイントについて書かせて頂きます。生徒対応や入学希望者との相談などのヒントになればと思っています。

過去の状況や問題を起因に 再び不登校になることも

不登校の生徒であっても高校進学に対する希望は高く、実際に文部科学省が行った追跡調査では、平成18年度の時点で不登校であった中学3年生の5年後(平成23年)の状況を調べた結果、85%が高校に進学していました。これは10年以上前の数値で、現在も進学希望が高い傾向は変わらず、私の実感としては95%以上であると思います。

これは、不登校生徒の高校進学に対する社会的状況(通信制・単位制高校の増加など)や、進路に対する中学校の指導や体制の変化、それに伴う不登校生徒の進学に対する考え方が変わってきた結果でしょう。

個々の生徒において、不登校状態(毎日の過ごし方)や学校・学習に対する考え方なども異なっており、身近な進路を選ぶ時の将来像が見えないという背景もあります。また、進路が決定すればそれで安心というわけ

ではなく、進学後も、もともとの不登校になった原因や、そのために生じた問題が起因となり、再び学校に行けなくなることも考えられます。このように、不登校生にとって進路決定の時期は大きな意味を持っており、その時にどのように対応をするかが重要になってきます。

日常の小さな「選択」と「判断」 意識する練習が自信につながる

不登校生が周囲の大人(保護者・先生等)と進路について話し合う時、おおよそ「高校には行きたい」が「勉強していないから、入試に受からない」、従って「行く高校がない」という展開になることが多くあります。これは学校から離れているが故の情報不足からくる間違った認識で、最近はネット情報やSNS上での不登校生の間違った情報も多く、子どもたちの決定を困難にしている要因にもなっています。この情報の收拾選択は大きな意味を持てきます。

そこで、不登校生徒の進路選択におけるポイントを整理してみました。

①本人の希望を尊重する

これが一番大事ではありますが、その希望を聞き出すのはなかなか難しいものです。

最近の生徒は自分で判断することを避ける傾向にあります。間違った判断をすることを恐れており、周囲から「自分で選んだことでしょう」と後で責任を取られ

るのではと不安を感じています。そこで、誰かに決めてもらうか、じっと時間切れになるのを待って「これしか選べなかった」というところまで判断しません。「失敗」を選びたくない心理が働き、「成功」の道を求める傾向があるため、自分で判断することができなくなってしまっているのです。しかし、一番大切なのは、選ぶことではなく、自分の選んだ道を「成功」にするかどうか。そのためには、努力が肝心であることを自覚する必要があります。

② 正確な情報と判断力を養う

自分の希望を決めるためには、正確な情報と判断力も必要です。偏った情報に左右されず、必ず自分の目で見て何度も体験に参加し、実際にそこに通っている生徒の姿や話を聞いてみるのが一番良いでしょう。不登校生自ら体験に行くことが難しい現状もあります。しかし、保護者と一緒や不登校生同士の見学会なら参加できることもあります。

判断力を身につけるためには、毎日の生活から小さなことでも自分で選択することです。「選択」・「判断」というと、人生の一大決心と聞こえてしまいがちですが、実は朝起きてから寝るまでの間に、「朝起きるか起きないか」「朝食を食べるか」「今日は何を着るか」など、意識するしないにかかわらず、毎日小さな判断を繰り返しているのです。その小さな判断の一つひとつが、今の自分そのものを作っています。今の自分は、過去の判断の結果であるという自覚が必要です。過去の判断の繰り返しが現在ならば、現在の判断の繰り返しが未来の自分を作ると

いうことです。一つひとつの判断を意識する練習ができれば、自分の自信に繋がります。

③ 「行ける学校より行きたい学校」を選ぶ

「不登校だから」「勉強してないから」という理由だけで特定の学校を勧められることがあります。しかし、どんな進路を選んでも、必ず困難や苦手が起きます。その時、その学校に行く意味や、必ずここで学びたいものがあるという思いがそれを越えていく力になります。

「行きたい学校」とは、自分の将来の目標にとって必要なスキルを学ぶところです。そのためにもなるべく早い段階から（不登校生は決めるまでに時間がかかることが多い）、学校見学への参加や先輩の話を聞くなどして情報を収集し、その学校に進む準備をする必要があります。努力をして進学した学校、行く意味のある学校は、困難なことや苦手なことがあっても乗り越えられます。



きむら・もとや 福岡市在住。不登校生の保護者会「ぼちぼちの会」会長。元福岡市立能古中学校校長。校長退職後、福岡市子ども総合相談センター嘱託相談員、太宰府市就学支援委員会副委員長などを経て、現在も教育相談や不登校生の支援活動が続ける。

月刊 学びREVIEW

[rivju:]

2020 4

月号



Interview

2020年度新設校 校長インタビュー [2]

英風高校（大阪府大阪市）

Series

シリーズ「家族の保健室」

家庭でできる発達支援

駿台甲府高校
多様な学習スタイルに備え、志望校合格

2020 年度 各校「入学式」

BOOK 森薫「家族が変わるとき」

コロナ禍の不登校

【連載】不登校支援の輪 (2) 木村素也
コロナ禍で消えた「不登校生の特別感」

【連載】こころのそえぎ (3) 福本早穂
コロナ休校下の学校に求められること



学びリンク

連載

不登校支援の 車輪

第2回

コロナ禍で消えた 「不登校生の特別感」

不登校生の保護者の会「ぼちぼちの会」

会長 木村 素也

新型コロナウイルス感染拡大防止を受け、小・中・高校は3月2日から突然、全国一律で休校となりました。学校や家庭に困惑と混乱が広がりましたが、もちろん不登校の子どもたちにとってもそれは大きな出来事でした。

学校現場はちょうど卒業の時期でもあり、学年のまとめや次年度に向けた進級準備の時期でもありました。不登校の子どもたちにどんな影響があったのか。また、どのように過ごしてほしいか。私の周りの子どもたちの様子からまとめます。

①卒業式

ゆっくり卒業と 向き合えるように

この時期、不登校の卒業生には「卒業式ははじめだから何とか参加してほしい」という有形無形の圧力がかかります。また、その前段階として式の練習や準備のための学級会、文集制作やアルバムの写真撮影など・・・、とにかく何とかして学校に登校させようとする圧力にさらされます。

本来、ここで一番大事なのは「本人がどう思うのか」なのですが、先生も保護者も良かれと思って子どもを言

いくるめようとするのです。ところが、今回の一斉休校によってその必要性がなくなり、不登校の子どもたちは、卒業式への向き合い方をゆっくり自分で選択することができました。私の知っている学校では、校長室や別室での証書授与など、様々な形式での受け取り方を選択できたものが多かったように思います。

②高校の単位認定

生徒が不利益に ならない対応

福岡県内では、ほとんどの高校が3月10日ごろに在校生の単位認定を行い、進級の可否を判断します。しかし今回、高校もその準備が十分ではなかったように思います。進路についての話し合いや追試なども、休校措置のため十分できなかったようです。

進級や転・編入など複雑な書類を必要とする手続きは、今回のような初めての状況の中で、高校側も臨機応変に対応せざるを得ませんでした。結果としては、子どもたちが不利益にならない形で対応されていました。

③長期休校

「学校に行かない」 ＝「他の人と同じ」

臨時休校が長くなるにつれ、「不登校生の特別感」が薄らいできました。

本来、不登校生は特別な子どもではありません。ちょっと学校に行けなくなっているだけで、他の子どもと何ら変わりはありません。ところが、周囲から「不登校生」というレッテルを貼られてしまうことで、だんだんと自己肯定感が低下し、まるで「学校に行かないことで悪いことをしている」ように感じてしまっているのです。

よく「エネルギーが切れて学校に行けなくなった。少しそっとしておいて、エネルギーがたまったら、やれることから始めたらいい。今は登校刺激をせずに見守りましょう」などと言われることがあります。

しかし、私は逆だと思います。不登校になり始めた時のほうがエネルギーはあり、「不登校をしているうちに、だんだんエネルギーが低下してくる」のだと思います。不登校をしている間に周囲から高評価をされることがなくなるため、ますます自尊感情が低下し、その結果、何もできなくなってしまう……。つまり、不登校の問題点は「学校に行かない」＝「他の人と別のことをしている」という意識の中で、周囲からも自分自身からもエネルギーが奪われてしまうことにあります。

ところが、今回の一斉休校は「学校に行かない」＝「他の人と同じ」ことになり、自尊感情は低下されず、「不登校生の特別感」がなくなりました。

「やっと落ち着いて自分のやりたい勉強ができる」
「親がいろいろ言わなくなって家庭が落ち着いている」
「友達とネットで一緒にゲームができる」
「人と会わなくてほっとしている」

など、不登校生たちが自由な気持ちを持ち、全体的に落ち着いてきているように思います。

「周囲から干渉されない期間」 を有効活用

今後の問題は休校明けの対応です。

不登校の子どもたちの気持ちが落ち着いているこの時に、保護者の方には、親子で将来についてしっかり話し合ってほしいと思います。子どもには、具体的に、何をどう頑張っていくかを考えさせてください。

「学校に行かないというだけで、何もできないわけではない。今できないことは無理にやらなくてもいい。しかし、今できることはしっかりやっ払いこう」

学校に行かなくても、できることがたくさんあるはずです。それを自分で見つけて実行することが大切です。わからなければ周囲の人に聞く。ただし、言われた通りにする必要はありません。良いと思ったことは取り入れ、自分に合わないところは無理をしない。なるべくたくさんの人の考え方を聞いて自分で選択する。人と話すことが苦手な人は本を読みなさい。どんな本でも作者の意図があります。読み手に伝えたいことがたくさん詰まっています。その中から自分に合ったものを取り入れてください。

せっかくの「周囲から干渉されない期間」を有効に活用して、学校再開後もぜひ自分で判断し、行動できる力を身につけてください。



きむら・もとや 福岡市在住。不登校生の保護者会「ぼちぼちの会」会長。元福岡市立能古中学校校長。校長退職後、福岡市子ども総合相談センター嘱託相談員、太宰府市就学支援委員会副委員長などを経て、現在も教育相談や不登校生の支援活動が続ける。